イラン戦争と反帝国主義の矛盾

Kamran Matin（カムラン・マティン）　2026 年 5 月 14 日



【AI 訳者の前振り】

なんどかメーリスでも紹介した ZINE《イランの人々のはなし［2025 年 12 月～2026 年３月]》をつくった仲間からの紹介された、ややお堅いマニアな論考を AI 訳にて紹介します。

筆者の Kamran Matin（カムラン・マティン）さんは、イギリスのサセックス大学国際関係論准教授であり、歴史社会学、国際理論、ナショナリズム、そしてイランおよびクルドの政治と歴史を専門としているそうです。

掲載サイト《The Amargi》（アマルギ）の紹介によると「彼の現在の研究は、不均等かつ複合的な発展（UCD）論、ネーション（国民・民族）とナショナリズム、および非西側諸国の植民地主義に焦点を当てている」とのことなので、レーニンの「不均等発展」よりも、トロツキーの「不均等勝つ複合的発展」（ブルジョア経済学的にいえば「蛙飛び論（リープフロッグ）」のこと）にシンパシーを持つ左派研究者かと思われます。《The Amargi》（アマルギ）は欧州を拠点するクルド研究者らのオピニオンサイトのようです。

この論稿では、今日の左翼の陣営主義をマルクスやレーニン、あるいはコミンテルンの帝国主義論に内包された問題点からの歪曲的発展として批判的に紹介しています。

結論までの論述は、マルクスの時代のロシア帝国批判論への向き合い方や、第一次世界大戦によって崩壊した第二インターナショナルのなかでの議論などを踏まえたもので、その辺の論争がわかっていないとすこし難しいかもしれません。

しかし結論の「何をなすべきか」の箇所は、けっこう明快で分かりやすいのでお勧めです。原文についていた多くの原注リンクは割愛したので、原文サイトをご覧ください。　　　　　　　　　　（い）

イラン戦争と反帝国主義の矛盾

Kamran Matin（カムラン・マティン）　2026 年 5 月 14 日 9:31 AM

原文 https://www.theamargi.com/posts/the-iran-war-and-the-contradictions-of-anti-imperialism

◎ 反帝国主義 イラン戦争

イラン戦争は、世界の左派における深い分断を露呈させた。ごく少数の潮流が、アメリカとイスラエルによる攻撃を帝国的侵略行為として非難すると同時に、イラン国家に対しても抑圧的な資本主義神権国家だとして糾弾している。しかし、それよりもはるかに大きな陣営は、アメリカの帝国主義は非難するがイラン・イスラム共和国の「反帝国主義」を理由に同国を支持している。

何千人もの左派を処刑し、数え切れないほどの抗議行動参加者を虐殺し、労働者、女性、ジェンダーマイノリティを冷酷に抑圧し、クルド人やその他の従属的民族を植民地主義的な抑圧のもとに置いている準ファシスト的な神権国家に対して、左派のかなりの部分が公然または暗黙の支持を与えているというのが現状だ。これは、フレッド・ハリディが「歪曲された反帝国主義（deformed anti-imperialism)」と呼んだものの兆候である。それは、「政治的・倫理的な観点から、帝国主義そのものよりも望ましいと言える代替案」を提示する能力を持たない半周辺部の独裁国家に対して、あまりにも容易に味方してしまう反帝国主義のことである。

西欧の帝国主義と対立しているというだけの理由で（第二次世界大戦時の日本のファシズムがそうであったように)、左派が資本主義の独裁国家に味方するというパラドックス――この「歪曲された反帝国主義」を、私たちはどのように説明すればよいのだろうか。

これらの問いに答えようとするいかなる試みも、帝国主義に関するマルクス主義理論への検証を必要とする。

◎ 帝国主義理論：波乱に満ちた歴史

出発点としてふさわしいのは、第一次世界大戦である。あの戦争は第二インターナショナルを分裂させ、その崩壊を早めた。

当時ヨーロッパで最も強力な社会主義政党であったドイツ社会民主党（SPD）は、ロシアがヨーロッパにおける反動の拠点であるため、ロシアを弱体化させることは進歩的であると主張し、ドイツ帝国による戦争への取り組みを支持した。

これとは対照的に、レーニンとボリシェヴィキは交戦国たちの階級的性質を強調し、あの戦争は帝国主義時代におけるライバル関係にある資本主義大国間の衝突であり、ヨーロッパのどの国家も進歩的な役割を果たすことはできないと主張した。そのためレーニンは、労働者に対して「祖国防衛」を拒否し、武器を「自国の政府とブルジョワジー」に向けることで、国家間の戦争を内戦へと転化させるよう促したのである。

レーニンの戦略は、帝国主義を「資本主義の最高段階」とする彼の理論に根ざしていた。ジョン・A・ホブソン、

ルドルフ・ヒルファーディング、そしてローザ・ルクセンブルクの議論を引用しながら、レーニンは、資本主義が金融資本（産業資本と銀行資本の融合）によって支配される独占段階に入ったと主張した。これにより、国内では収益性の高い投資を行うことができない余剰資本が生み出され、それが海外へと輸出されなければならなくなり、地政学的な競争が激化して最終的には戦争へと行き着いたのである。

その後のマルクス主義者たちは、レーニンの理論を異なる方向へと再構築していった。ポール・バランとポール・スウィージーは資本主義的な競争から関心を移し、「独占資本主義」のもとでは、帝国主義は先進国経済における停滞を管理するためのメカニズムとして機能することが増えていると主張した。

1960 年代までに、アンドレ・グンダー・フランク、サミール・アミン、そしてより広い歴史的意味においてはイマニュエル・ウォーラーステインといった従属理論家たちは、帝国主義を世界経済の「中心」と「周辺」との間の構造的関係として描き直した。彼らの主張によると、グローバル・ノース（地球北半球の先進国）における資本主義の発展は、グローバル・サウス（地球南半球の発展途上国）における低開発を構造的に再現しているという。そのため彼らは、西側が支配する世界システムからの様々な形態の「離脱（分断）」を提唱した。

レーニンの帝国主義論と従属理論は、1960 年代から 1970 年代にかけて大きな挑戦を受けることとなった。

自由主義的な経済史ストリアン（経済史家）であるＤ・Ｋ・フィールドハウスは、イギリスの資本輸出が植民地周辺部ではなく、圧倒的に他の中心的な資本主義諸国へと流れていたことを示す証拠を提示した。これは、レーニンの帝国主義論の核心的な前提を揺るがすものであった。

また、ビル・ウォーレンは著書『帝国主義：資本主義の先駆者（Imperialism: Pioneer of Capitalism）』の中で従属理論に異を唱え、歴史的に帝国主義が資本主義的な社会関係を拡大させ、植民地およびポスト植民地世界における工業化の基礎を築いたことを証明した。さらに戦後の時期は、ガイア・ルンデスタッドが「招待された帝国（empire by invitation）」と呼んだ現象、すなわちアメリカ主導の経済的・地政学的構造への自発的な統合も目撃することとなった。

より最近では、中国の急速な工業化が、資本主義は西側の「中心」の外側において必然的に「低開発の発展」を伴うという、レーニン主義および従属理論の双方における主要な前提に疑問を投げかけている。

レーニン主義や従属理論の帝国主義論において注目すべき点は、資本主義を、その容赦ない自己普遍化への傾向が未来の共産主義社会の基礎を形成するような「歴史的に進歩的な生産様式」であるとしたマルクスの説明を、それらが暗黙のうちに否定していたということである。

◎「歪曲された反帝国主義」：マルクスが意図せず果たした役割

マルクス主義の帝国主義論が、マルクス自身の資本主義観（資本主義の本質についての捉え方）を暗黙のうちに否定しているというパラドックスは、マルクスの資本理論が帝国主義を明確に理論化していないという事実によって覆い隠されてきた。しかし、それはなぜなのだろうか。

これに答えるためには、帝国主義を、その特殊な「資本主義的形態」を超えたものとして理解しなければならな

い。帝国主義とは、一つの社会（または複数の社会）が別の社会によって支配されることである。したがって、それは明らかに複数の社会の存在、すなわち「社会的多様性（societal multiplicity）」を前提としている。しかし、社会的多様性こそが、マルクスの社会理論である史的唯物論の前提からまさに欠落しているものなのである。

私が著書『イランの近代性の再構築：国際関係と社会変動（Recasting Iranian Modernity: International Relations and Social Change）』で示唆したように、史的唯物論は「単一の社会」という概念に基づいている。マルクスの最大の関心は、複数の社会の水平的な多様性とそれが社会生活にもたらす帰結――マルクス主義の国際理論が「国際的なもの（the international）」と呼ぶもの――ではなく、垂直的な階級関係にある。マルクスは「国際的なもの」を階級関係の産物として扱っており、最終的には共産主義世界において消滅する運命にあると考えている。

社会的多様性を組み込むことに失敗している点は、『資本論』において最も明確に表現されている。そこでのマルクスは、「我々は貿易の世界全体を一つの国家として扱わなければならない」と書いている。しかし、それは彼の初期の著作、特に『1844 年の経済学・哲学手稿』にも暗黙のうちに流れている。

同様に重要な点として、マルクスは、経済領域と政治領域を分離させた点で資本主義は歴史的にユニークであると主張した。「資本の原始的蓄積」――直接的生産者が生産手段から切り離されること――から生じたこの分離は、純粋に政治的な形態の主権を可能にする。これにより、国家主権を必ずしも侵害することなく、資本が国境を越えて移動することが可能になる。

これが今度は、世界規模での蓄積を可能にし、ジャスティン・ローゼンバーグが「市民社会の帝国（the empire of civil society）」と呼ぶものを生み出す。このように資本主義のもとでは、国内において平等な政治的権利と社会経済的不平等が共存しているのとまったく同じように、国際的には物質的に不平等な国家同士が、公式には主権を持つ対等な存在として共存できるのである。これが、現代の帝国主義を特徴づける非領土的な「非公式帝国（informal empire）」を支えている。

したがって、マルクスが帝国主義を理論化できなかったのは、彼の単一的な社会存在論の産物であり、マルクス主義の帝国主義論はこれに対処することができなかった。国際社会間のダイナミクスに注意を払っている理論でさえ、社会的多様性を、資本主義の危機の「空間的修正（spatial fix）」のための受動的な領域（デヴィッド・ハーヴェイ）として残すか、あるいは資本とは異なる独自の論理を持つもの（アレックス・カリニコス）として扱うにとどまっている。

この失敗は、反帝国主義の実践（プラクシス）に問題のある形で影響を与えた。特に 2 つの帰結が深く関係している。

キアラン・マッカラムが近く発表予定のエッセイで主張しているように、これまでの帝国主義論は、帝国主義を経験的かつ表層的な方法で、特定の西側資本主義国家の機能として捉える傾向があった。その結果、それらの理論は限定的な範囲の歴史的帝国主義、主に西側のものしか説明することができなかった。これは、サラ・ケルマニアンが「二元論的想像力（dualist imaginary）」と呼ぶものの一例を含んでおり、西側と非西側という二項対立を歴史的な決定要因として扱うものである。その帰結は、陣営主義的な左派が、ウクライナにおけるロシアの帝国主義、チベットにおける中国の帝国主義、そして西アジアにおけるトルコやイランの帝国主義的振る舞いに対して沈黙していることに、明確に表れている。

さらに、帝国主義論は、敵対関係にない国際関係に基づいた、反帝国主義的な解放という「進歩的プロジェクト」を構築することに失敗した。その代わりに反帝国主義は、「外部からの影響の排除」という否定的な（後ろ向きの）形で定義されるようになった。実践において、これは階級闘争を国家主権の防衛へと置き換えてしまい、しばしば排外主義を特徴とする「国家主義的なナショナリズム」を生み出すことになった。イランの反帝国主義的左派の言説において、「外国による侵略」という概念は中心的な決まり文句となっている。

事実、現代の反帝国主義の多くは、実質的に「介入」の絶対的禁止を提唱している。この立場は、すべての社会の内部において、意味のある自己決定（民族自決）権がすでに存在しているということを前提としているが、これは明らかに維持が不可能な主張である。マルクス自身、インドにおけるイギリスの植民地主義に対して、複雑で曖昧な態度をとっていたことで有名である。

反帝国主義としての国家主義的ナショナリズムは、ロシア革命が西ヨーロッパでの革命を誘発することに失敗したことから生まれた。それは、バクーで開催された 1920 年の「東方諸民族大会」において、コミンテルンの公式方針となった。ヴェルナー・ボーンフェルトが指摘するように、この大会は反帝国主義を優先して階級闘争を「静かに棚上げ」した。この転換は、その後にスターリンの「一国社会主義」ドクトリンによって強化されることとなる。

冷戦期、国家主義的ナショナリズムは、親ソ連派の左派の多くにとって事実上の戦略となった。すなわち、アメリカと衝突している国家であれば、たとえそれがレーニンの言葉を借りれば「抑圧民族」であったとしても防衛するという戦略であり、イランはその典型的な例である。

そのような反帝国主義は、新自由主義の台頭、ソ連の崩壊、そしてヨーロッパの大部分における組織された労働者階級運動の敗北の後に、さらに定着していった。

イランにおいては、この傾向は 1980 年代のイスラム共和国による左派への無慈悲な弾圧と、1990 年代以降の改革派知識人――イスラム・オリガルヒ的（寡頭制的）資本主義のイデオローグ（思想的指導者）たち――による反左派キャンペーンによって強化された。そして 9.11 以降のアメリカによるイラクやアフガニスタンでの戦争が、こうした反帝国主義の言説をさらに強固なものにしたのである。

◎ 何をなすべきか？

現代の反帝国主義の多くが抱える悲劇は、人々との連帯を、反西側国家との同盟へと置き換えてしまったことである。そうすることによって、それは自身が反対していると主張する支配の論理そのものを再現してしまっているのだ。この置き換えは偶然のものではなく、突き詰めればマルクスの社会理論における「存在論的な空白」を反映している。すなわち、帝国主義を理解する上で核心となる「社会的多様性」の欠如である。その結果、これまでの帝国主義論は、帝国主義を「非西側国家に対する西側の侵害」へと矮小化する傾向があった。その過程で失われてしまったのは、地政学的なアクターとしての「国家」と、その国家が代表していると主張する社会を構成する「異質な社会勢力」との区別である。

したがって、現在実際に存在する反帝国主義の多くが持つ破滅的な欠陥は、国家の地政学的な自立性を、その国

家が支配する人々の解放と勘違いしている点にある。帝国主義を「西側」とその挑戦者および敵対者との間の対立として組み立てることによって、西側以外の社会そのものの内部にある階級、植民地、そして家父長制的な支配関係が見落とされてしまうのである。その結果、表向きは急進的な国際主義政治の形をとりながら、実質的には内部の抑圧と搾取の構造や装置を正当化し、再現することに加担する政治が生まれてしまうのである。

それゆえ、反帝国主義を真に民主的で解放的な実践へと再活性化させるためには、ユーロセントリズム（欧州中心主義）や国家主義的な枠組みを越え、どこにいる人々であれ、階級、国家（民族）、ジェンダーのあらゆる階層秩序から解放され、すべての人々が平等かつ民主的に共存することに基づいた、真に国際主義的かつ人道的な解放の概念へと移行する必要がある。

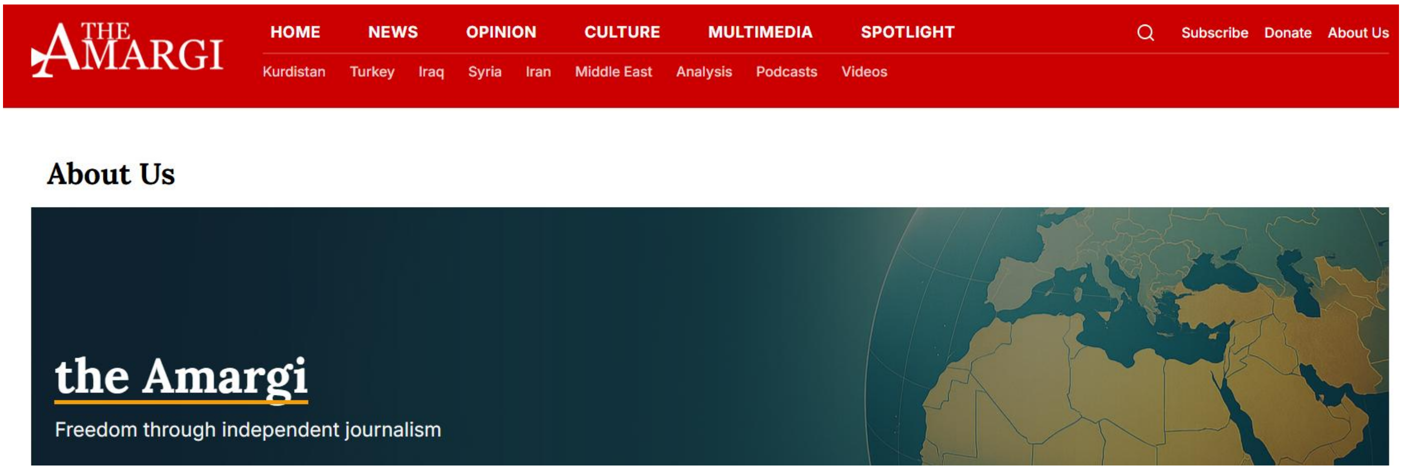
これは「3 つの運動」を要求する。理論的には、マルクス主義的規範の内部にある「歪曲された反帝国主義」の起源と対峙することである。政治的には、労働者、女性、マイノリティ、あるいは国家を持たない民族の従属の上に築かれる解放のプロジェクトなど存在し得ない、という前提から出発することである。そして戦略的には、西側中心的な帝国主義観に導かれるのではなく、国際的かつインターセクショナル（交差性的）なビジョンによって導かれるプログラムを採用することである。そのビジョンは、いかなる特定の局面においても、資本主義、植民地主義、そして家父長制の連鎖の中の「最も弱い環」に政治的に集中するものなのである。

◆筆者紹介：Kamran Matin（カムラン・マティン）

https://www.theamargi.com/authors/80



Kamran Matin（カムラン・マティン）は、イギリスのサセックス大学国際関係論准教授であり、歴史社会学、国際理論、ナショナリズム、そしてイランおよびクルドの政治と歴史を専門としている。彼の現在の研究は、不均等かつ複合的な発展（UCD）論、ネーション（国民・民族）とナショナリズム、および非西側諸国の植民地主義に焦点を当てている。彼は『移民におけるクィア・アイデンティティ：イラン人の旅（Queer Identities in Migration: Iranian Journeys）』（ブリストル大学出版局、2026 年）の共同著者であり、『イランの近代性の再構築：国際関係と社会変動（Recasting Iranian Modernity: International Relations and Social Change）』（ラウトレッジ社、2013 年）の著者、そして『歴史社会学と世界史：長期的な視点における不均等かつ複合的な発展（Historical Sociology and World History: Uneven and Combined Development over the Longue Durée）』（ロウマン＆リトルフィールド・インターナショナル社、2016 年）の共同編集者である。また、クルドおよびイランの政治に関する多数の論文、論評、オプエド（論説）を発表している。ワシントン D.C.のクルド平和研究所（Kurdish Peace Institute）の客員研究員、およびハンブルクのドイツグローバル地域研究所（GIGA）の客員研究員（リサーチ・アソシエイト）も務めている。



◆《The Amargi》（アマルギ）について

https://www.theamargi.com/about

私たちについて

「The Amargi（アマルギ）」は、ヨーロッパを拠点とするジャーナリスト、活動家、学者らのグループによって設立され、草の根の資金援助によって運営されているオンラインメディアである。私たちはあらゆる商業的・政治的影響から独立しており、私たちのドナー（寄付者）は、自身の民主的な価値観が当メディアの編集方針と一致しているという理由で私たちを支援している。

アマルギはクルディスタンにスポットライトを当てているが、トルコ、イラク、シリア、イラン、そしてより広い中東地域にも焦点を当てている。非民主的な政権、外国による介入、そして強力な大企業が政治的言説を決定づけ、自己決定（民族自決）や異議申し立て、多様性を抑圧しているこの地域において、私たちは無力化され、声を奪われた人々の強力な代弁者（声）となることを目指している。「アマルギ」というシュメール語は、歴史上「自由」を意味する最古の既知の文字（言葉）とされている。

その名に暗示されているように、アマルギの核心的な価値観は、自由、民主主義、多様性、共生、平等、そして社会正義である。私たちは専門性を持って報道し、恐れることなく調査を行う。それと同時に、中東の社会を強化し、その人々やコミュニティを繋ぐための価値観を推進している。私たちは社会的・民族的マイノリティの側に立ち、性差別、人種差別、ファシズム、過激主義、そしてあらゆる形態の差別や不公正に反対する。

アマルギは、ドイツのライプツィヒを拠点とする非営利メディア組織「Amargi e.V.（アマルギ登録法人）」によって運営されているプロジェクトである。私たちは中東に焦点を当て、文化的多様性を推進し、取り残された（限界化された）人々の声を拡大し、民主的な原則、人権、そして環境意識を支援している。独立したジャーナリズム、メディア教育、そして異文化間対話を通じて、私たちは批判的検証（リフレクション）と知識交換のための包括的なプラットフォームを育成している。ドイツ国内およびそれ以外の地域における取り組みを通じて、Amargi e.V.は地域社会とグローバル社会を繋いでいる。私たちは不当な情報（ディスインフォメーション）と戦い、若者、女性、マイノリティが公正で多元的な社会の構築に有意義に貢献できるよう力を与えている。

ドナー（寄付者）になってアマルギを支援し、その活動の拡大を助けたいと考えていただける場合は、contact@theamargi.com までご連絡を。